

京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～
調査結果分析

学校改善支援プラン

令和6年3月
京都府教育委員会

目次

I 京都府学力・学習状況調査の概要

- 1 調査名称
- 2 調査目的
- 3 調査対象
- 4 調査時期
- 5 調査の内容
- 6 調査の特徴
- 7 新たな調査を導入した経緯

II 結果の概要

- 1 学力の伸び
- 2 学力の状況
- 3 質問調査の状況
- 4 中学校国語の設問別調査結果
- 5 小学校国語科の授業改善のポイント
- 6 中学校国語科の授業改善のポイント

III 結果からの考察

IV 調査結果の活用

- 1 児童生徒の状況を多角的に「Research」し、「Vision」を共有し、「Plan」を立案
- 2 結果データを分析（Check）し、具体的な手立て（Action）を計画し実施
- 3 年度末に、今年度の学びの変容を再度「Research」し、次年度の「Vision」を共有し、「Plan」を立案
- 4 各研修会の内容
- 5 実践事例

参考資料

- ・「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」における非認知能力等に関する概念質問項目対応表について」
- ・（様式1：参考様式）学校改善プラン
- ・（参考様式）「自分の学びの様子と成長を振り返ろう」

I 京都府学力・学習状況調査の概要

I 京都府学力・学習状況調査の概要

- 1 調査名称 京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～
- 2 調査目的 学習指導要領に示す目標や内容に照らした学習の実現状況及び児童生徒の学習環境や家庭における生活状況等の特徴や課題など、児童生徒の「認知能力の伸び」と「非認知能力の変容」を継続的に把握する。その伸びや変容に影響を与える諸要因を客観的データに基づき分析・考察し、個別最適な学びと協働的な学びを実現する教員の指導力等についての有用な情報を得ることにより指導上の課題を明らかにして、授業改善を推進し、確かな学力をはぐくむ。
- 3 調査対象 実施を希望する小学校第4学年～第6学年並びに中学校第1学年～第3学年、義務教育学校前期課程第4学年～第6学年並びに後期課程第7学年～第9学年、特別支援学校小学部第4学年～第6学年並びに中学部第1学年～第3学年（京都市除く）

【令和5年度受検者数（人）】

	小学校 第4学年	小学校 第5学年	小学校 第6学年	中学校 第1学年	中学校 第2学年	中学校 第3学年
国語	9,117	9,129	9,352	9,088	8,953	8,907
算数・数学	9,108	9,130	9,358	9,086	8,955	8,925
英語					8,948	8,915
実施校数	200	200	200	100	100	100

4 実施時期

- (1) 小学校第4学年～第6学年、義務教育学校前期課程第4学年～第6学年
特別支援学校小学部の第4学年～第6学年
令和5年5月22日（月）から5月26日（金）までの実施指定日に、各校1学年ずつ実施
- (2) 中学校第1学年～第3学年、義務教育学校後期課程第7学年～第9学年
特別支援学校中学部第1学年～第3学年
令和5年5月15日（月）から5月19日（金）までの実施指定日に、各校1学年ずつ実施

5 調査の内容（調査時間、出題内容、出題数、出題範囲等）

(1) 教科に関する調査

ア 出題内容

基礎的・基本的な知識や技能を問う問題と知識・技能を活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等を問う問題の約30問。解答方法は、選択式及び短答式とする。

イ 出題範囲

- ・小学校第4学年～第6学年、義務教育学校前期課程第4学年～第6学年
前年度までの国語科、算数科の学習内容の定着状況が把握できるもの
- ・中学校第1学年及び義務教育学校後期課程第7学年

- 小学校修了段階までの国語科、算数科の学習内容の定着状況が把握できるもの
- ・ 中学校第2学年～第3学年、義務教育学校後期課程第8学年～第9学年
- 前年度までの国語科、数学科、外国語科（英語）の学習内容の定着状況が把握できるもの
- ウ 時間配当

小学校第4～第6学年は1教科40分、中学校第1～第3学年は1教科45分を標準実施時間とする。

(2) 児童生徒質問調査

ア 出題内容

生活状況に関する項目、非認知能力に関する項目、学習方法等に関する項目、ICT利用に関する項目で構成した小・中学校共通の約100問の選択式の質問（外国語（英語）に関する項目は小学校は回答しない）。

イ 時間配当

小学校第4～第6学年は40分程度、中学校第1～第3学年は45分程度を目途に実施。

6 調査の特徴＜IRT×CBT方式＞

- (1) 教科に関する調査及び項目反応理論【IRT（Item Response Theory）】を用いた学力の推定
- 異なる調査でも、調査結果を直接比較することができるIRTを用いることで、学力の伸びを確かめることが可能となる。

*上記のためには、「過去問題」の利用が必要であるため、出題問題は非公表

- (2) 非認知能力や学習への取り組み方等を確認められる質問調査

京都府教育振興プランに示す3つのはぐくみたい力*、学習への取り組み方等について、複数の質問項目を組み合わせることで測定

(*「主体的に学び考える力」、「多様な人とつながる力」、「新たな価値を生み出す力」)

- (3) 調査方法

1人1台端末を用いた調査（CBT：Computer Based Testing）とする。なお、通信環境調査の結果を踏まえ、CBTでの実施が難しい場合に限り、紙による調査（PBT：Paper Based Testing）での実施も可とする。また、本調査では、問題の難易度の推定や児童生徒の学力の推定のために、IRT（項目反応理論）という統計理論を用いることで、これまでの調査では確認することのできなかつた児童生徒の個人内の学力の伸びを確認することができる。

7 新たな調査を導入した経緯

- (1) 従来の学力診断テストからの変更

京都府教育委員会では、平成3年度から令和3年度まで、小学校第4学年及び中学校第1学年において「京都府小学校学力診断テスト」を実施するとともに、平成15年度から令和3年度まで、中学校第2学年において「京都府中学校学力診断テスト」を実施してきた。

令和5年度からは、「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」と銘打って新たな学力調査を実施することに変更した。

*：平成24年度までは、中学校第1学年ではなく、小学校第6学年で実施

(2) 調査方法の変更理由

現在の学習指導要領（平成29～31年改訂）の公示以降の社会や学校教育の変化を踏まえ、文部科学省が示した「令和の日本型学校教育」^{※1}の考え方の中では、全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実が求められている。京都府においても、個々の児童生徒の実態を適切に捉え、その可能性を伸ばしていくことができるような環境を整えていくことが重要である。

一方で、従来の府内における児童生徒の学力・学習状況の把握・分析方法を振り返ると、平均値を手掛かりにして、自校の平均値と府の平均値との比較や学校間・市町間での比較等、個々の児童生徒よりも学校・市町といった集団を視点にして把握・分析を行うことが多くあった。場合によっては、平均値にのみ着目し、過度な順位競争につながるようなことがあったことも否めない。また、学力調査の結果は、ある時点における学力の特定の一部分を調査したものであるため、学校教育においては「はぐくみたい力」^{※2}が把握しづらい面や、個々の児童生徒の学力が経年でどのように変化したのかを把握しづらい面がある。

このようなことを踏まえて、京都府教育委員会では、一人一人の認知能力を伸ばし、非認知能力の変容を測るための「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」を設計し、令和5年度から本格実施することとした。

※1：『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（令和3年1月26日中央教育審議会）、「教育課程部会における審議のまとめ」（令和3年1月25日中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会）

※2：京都府教育振興プランに示す「3つのはぐくみたい力」：「主体的に学び考える力」、「多様な人とつながる力」、「新たな価値を生み出す力」

(3) 公表内容について

「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の最大の特徴である「個々の伸び」に注目できる形で公表することとした。

他方、全国学力・学習状況調査については、「各地域等における教育水準の達成状況をきめ細かく適切に把握すること」、「すべての教育委員会、学校等が、全国的な状況との関係における学力に関する状況、教育条件の整備状況、児童生徒の学習環境や家庭における生活状況等を知り、その特徴や課題などを把握すること」等を目的にしている。そのため、引き続き、集団を視点にした結果等を公表していくこととする。

また、全国学力・学習状況調査の結果公表においては、実際に出題された問題例も紹介しながら、学習状況を公表している。一方、「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」は「個々の伸び」を測るために、アンカー問題（難易度が振られた過去の問題）も出題することから、出題した問題は非公開とすることが大原則となる。よって、「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果公表においては、出題した問題例は紹介しないこととする。

ただし、「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」においては、新たに質問調査も見直し、非認知能力に関連する調査や学習方法等やICT活用を児童生徒自らが振り返る質問調査を加えた。学力状況や学力の伸びとこれら非認知能力等との関連性も分析することができるようになるため、それらの分析結果も公表していくこととする。

Ⅱ 結果の概要

*すべて京都市を除く京都府のデータ

1 学力の伸び

○昨年度の調査から学力が伸びた児童生徒数の割合（％）【参考値】

	小学校 第5学年	小学校 第6学年	中学校 第1学年	中学校 第2学年	中学校 第3学年
国語	82.3	74.3	74.5	69.2	72.8
算数・数学	85.0	83.9	86.5	74.0	79.3
英語					86.7

※本調査は令和5年度から調査を開始しているため、上表については、実証研究校（府内30校）の伸びのデータを【参考値】として記載。

※小学校18校：5年国語956人、5年算数957人、6年国語924人、6年算数922人

※中学校12校：1年国語773人、1年数学773人、2年国語1210人、2年数学1208人、

3年国語1134人、3年数学1136人、3年英語1135人

※算出の仕方 $\frac{\text{学力が伸びた児童生徒}}{\text{受検者数}} \times 100 = \text{学力が伸びた児童生徒の割合（％）}$

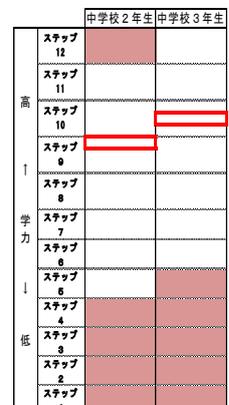
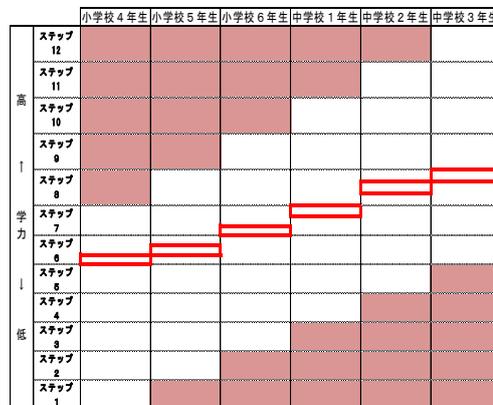
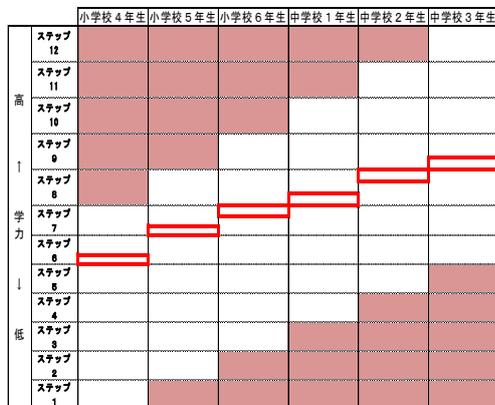
2 学力の状況

○令和5年度の各教科、各学年の府平均学力ステップ

国語

数学

英語



※各学年で測定できる学力のステップは下記の範囲内【36段階（12ステップ×3層*）】で設定

小学校 第4学年	小学校 第5学年	小学校 第6学年	中学校 第1学年	中学校 第2学年	中学校 第3学年
1-C～7-A	2-C～8-A	3-C～9-A	4-C～10-A	5-C～11-A	6-C～12-A

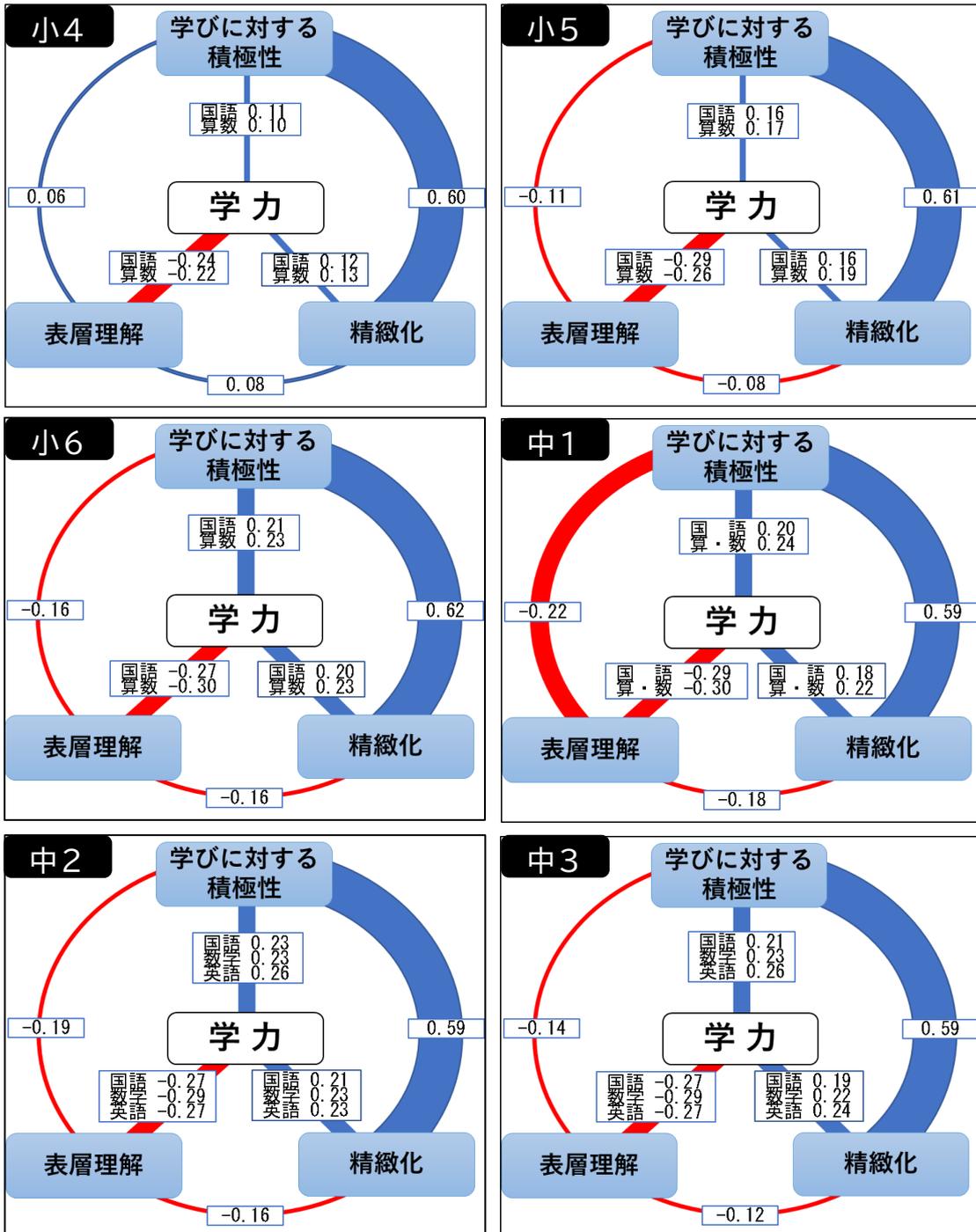
※各ステップの中で学力の高い順からA、B、C

3 質問調査の状況

(1) 教科に関する調査結果と質問調査の結果の相関関係の例

数字は相関係数を示す
 青線は正の相関係数を示す
 赤線は負の相関係数を示す
 線の太さは相関の強さを示す
 ±0.2以上細線
 ±0.4以上太線

各項目の質問内容は参考資料『京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～』における非認知能力等に関する概念質問項目対応表について」を参照



教科に関する調査結果と「学びに対する積極性」及び「精緻化」との相関関係は、小学校第6学年以上の学年において正の相関がやや高くなる傾向がみられた。また、教科に関する調査結果と「表層理解」との間には負の相関がみられ、小学校第5学年以上の学年で顕著にみられる傾向にあった。学力ステップが高い児童生徒ほど、学びを広げたり深めたりするために自ら積極的に調べたり学んだりしようとする質問や、学んだことを関連付けたり活用・発揮したりする学習経験についての質問に対して肯定的に回答していることが分かった。

(2) 非認知能力及び学習方法の相互の相関関係

「学びに対する積極性」との相関係数						
	小4	小5	小6	中1	中2	中3
自己調整	0.63	0.64	0.66	0.63	0.65	0.64
好奇心	0.49	0.50	0.51	0.46	0.47	0.49
思考の柔軟性	0.51	0.50	0.49	0.42	0.41	0.41

「精緻化」との相関係数						
	小4	小5	小6	中1	中2	中3
体制化	0.68	0.67	0.66	0.60	0.61	0.58
主体的・対話的で深い学び（国語）	0.70	0.65	0.59	0.53	0.44	0.41
主体的・対話的で深い学び（算数・数学）	0.66	0.63	0.57	0.50	0.42	0.40
主体的・対話的で深い学び（英語）					0.40	0.40

「主体的・対話的で深い学び」における教科間の相関係数						
	小4	小5	小6	中1	中2	中3
主体的・対話的で深い学び（国語と算数・数学）	0.76	0.76	0.74	0.63	0.57	0.54
主体的・対話的で深い学び（国語と英語）					0.58	0.58
主体的・対話的で深い学び（算数・数学と英語）					0.60	0.55

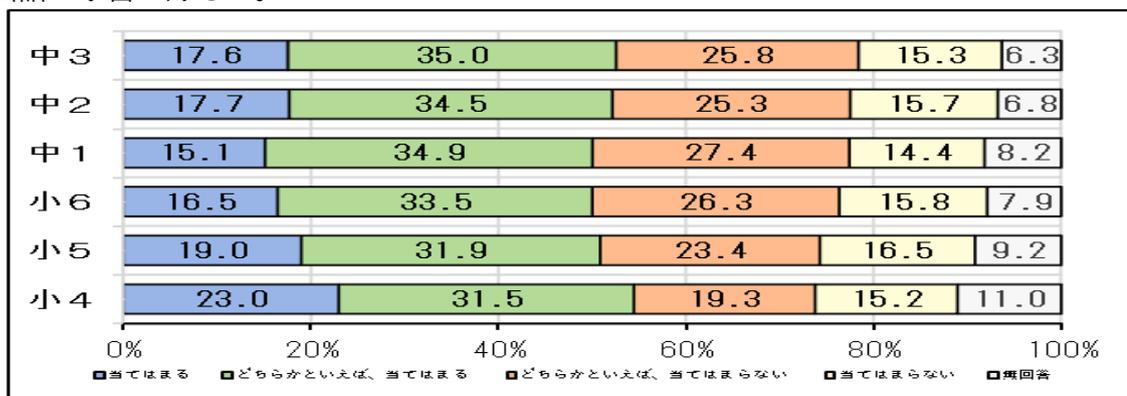
「学びに対する積極性」という質問項目の回答状況を分析すると、「自己調整」、「好奇心」、「思考の柔軟性」との間に相関が見られた。

「精緻化」という質問項目の回答状況を分析すると、「体制化」、「主体的・対話的で深い学び」との間に相関が見られた。

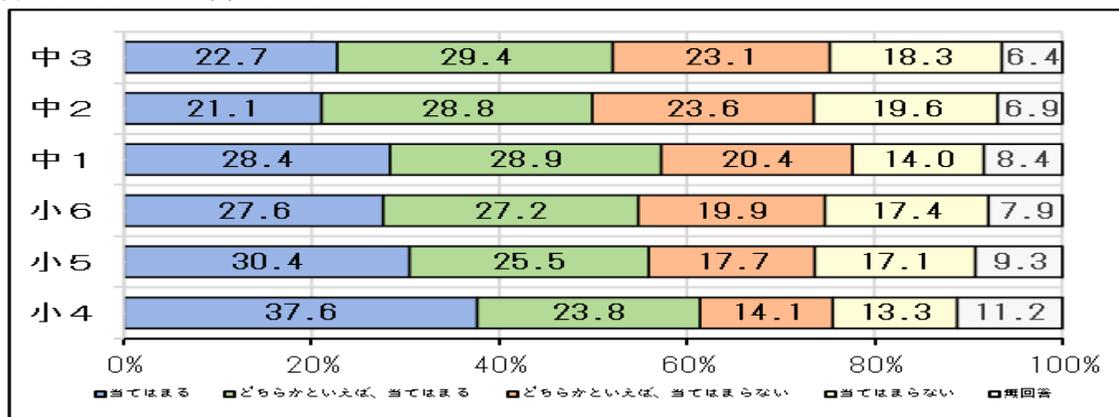
「主体的・対話的で深い学び」の項目の結果から、中学校は小学校と比較して、教科間で「主体的・対話的で深い学び」からの授業改善に差があることが見受けられた。

(3) 質問調査状況（教科の学習が好きだ）

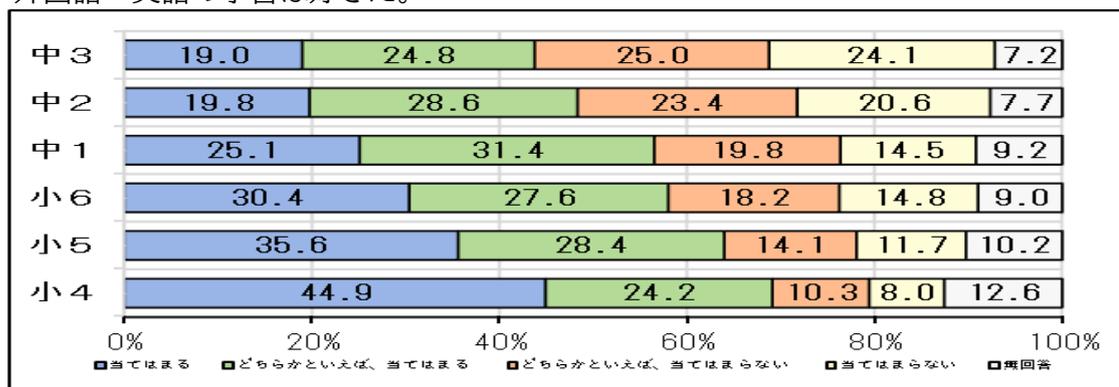
- ・国語の学習は好きだ。



・算数・数学の学習は好きだ。



・外国語・英語の学習は好きだ。



・各ステップの割合

「肯定的」(「当てはまる」+「どちらかといえば、当てはまる」)

「否定的」(「どちらかといえば、当てはまらない」+「当てはまらない」)

小4 国語	ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7
肯定的	0.3%	0.4%	2.0%	6.9%	14.6%	13.9%	22.9%
否定的	0.4%	0.6%	2.1%	6.8%	10.5%	8.6%	9.8%

小4 算数	ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7
肯定的	0.2%	0.4%	2.9%	7.9%	19.8%	19.9%	17.8%
否定的	0.3%	0.4%	2.9%	5.9%	11.1%	6.6%	3.4%

小5 国語	ステップ2	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8
肯定的	0.2%	0.4%	3.1%	9.1%	11.7%	11.7%	19.5%
否定的	0.2%	0.7%	4.3%	10.0%	11.6%	8.1%	9.0%

小5 算数	ステップ2	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8
肯定的	0.2%	1.3%	3.7%	12.2%	15.6%	15.7%	12.7%
否定的	0.4%	1.8%	5.3%	13.1%	9.8%	5.7%	2.0%

小6 国語	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9
肯定的	0.5%	1.6%	5.6%	7.3%	12.9%	8.0%	18.3%
否定的	0.6%	2.7%	8.1%	8.6%	11.6%	5.2%	8.4%

小6 算数	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9
肯定的	0.5%	2.3%	6.9%	11.1%	15.0%	10.8%	12.5%
否定的	1.3%	4.3%	10.0%	10.3%	9.0%	3.5%	2.0%

中1 国語	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10
肯定的	0.9%	1.9%	5.6%	12.6%	14.4%	10.6%	8.4%
否定的	1.3%	2.5%	7.2%	12.6%	11.4%	6.1%	4.3%

中1 算数・数学	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10
肯定的	1.0%	4.5%	6.2%	14.8%	14.4%	12.6%	8.9%
否定的	1.6%	6.0%	7.1%	10.4%	6.9%	3.8%	1.3%

中2 国語	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10	ステップ11
肯定的	1.0%	3.6%	9.8%	15.0%	12.9%	7.9%	6.1%
否定的	1.8%	4.8%	10.4%	12.2%	8.2%	4.0%	2.8%

中2 数学	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10	ステップ11
肯定的	2.0%	5.5%	8.2%	10.4%	11.0%	9.9%	7.0%
否定的	4.4%	10.6%	11.1%	9.5%	6.2%	3.3%	1.4%

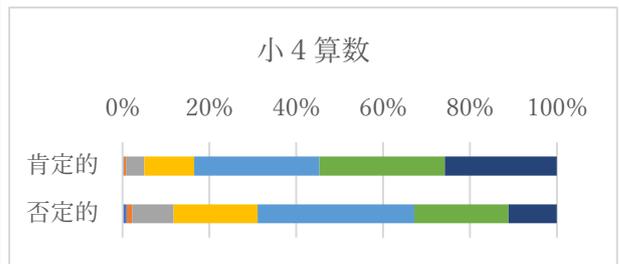
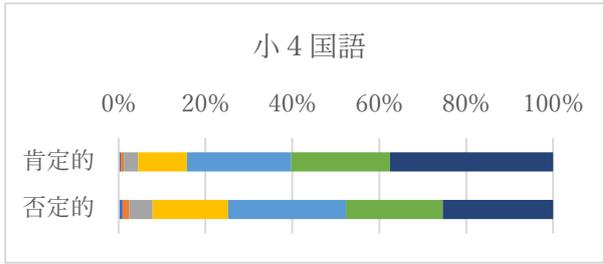
中2 英語	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10	ステップ11
肯定的	0.4%	1.7%	4.7%	7.8%	8.6%	9.4%	19.7%
否定的	1.0%	3.8%	10.6%	11.8%	7.6%	6.3%	6.3%

中3 国語	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10	ステップ11	ステップ12
肯定的	2.8%	6.8%	15.6%	13.1%	12.2%	5.1%	2.4%
否定的	3.4%	7.4%	15.3%	9.3%	6.4%	2.3%	0.9%

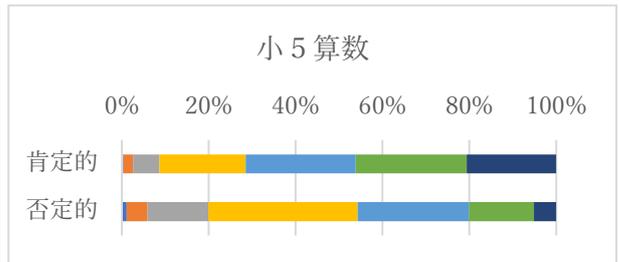
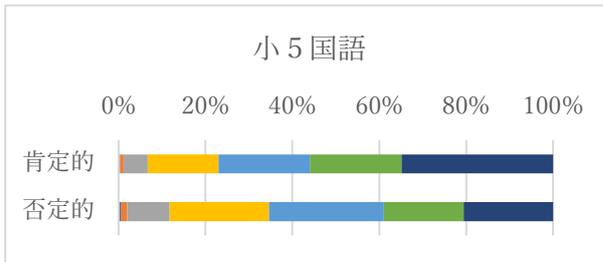
中3 数学	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10	ステップ11	ステップ12
肯定的	4.9%	6.1%	12.8%	14.2%	7.5%	7.4%	4.4%
否定的	9.8%	9.5%	12.3%	8.3%	3.2%	2.0%	0.6%

中3 英語	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10	ステップ11	ステップ12
肯定的	0.3%	2.3%	4.6%	6.0%	7.7%	9.9%	17.4%
否定的	1.4%	7.9%	12.2%	10.9%	9.2%	7.3%	5.0%

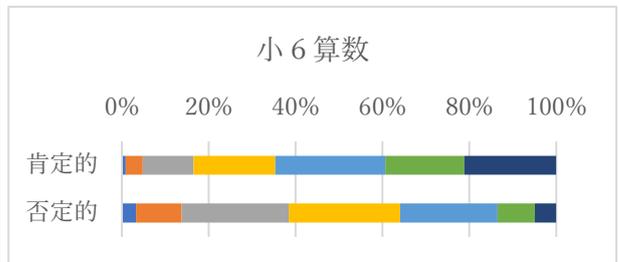
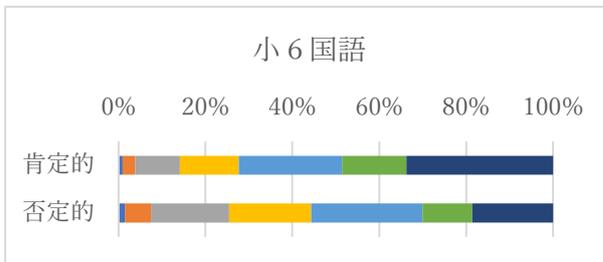
・肯定的回答、否定的回答それぞれにおける各学カステップの割合



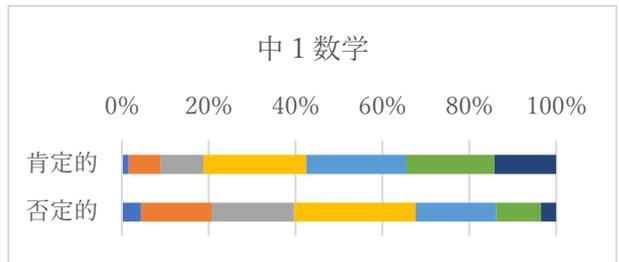
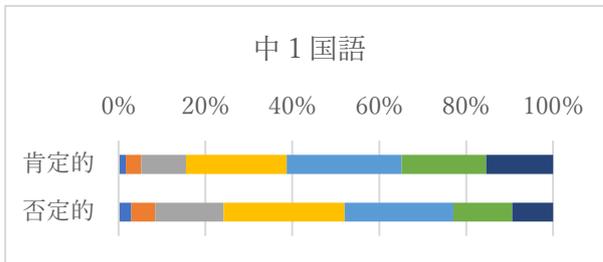
■ ステップ1 ■ ステップ2 ■ ステップ3 ■ ステップ4 ■ ステップ5 ■ ステップ6 ■ ステップ7



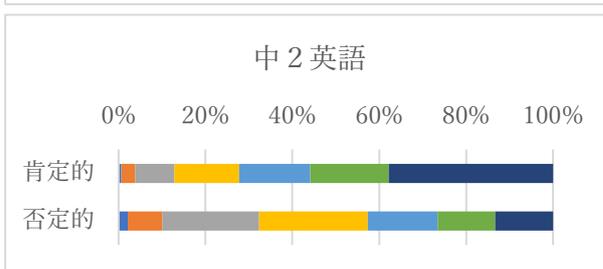
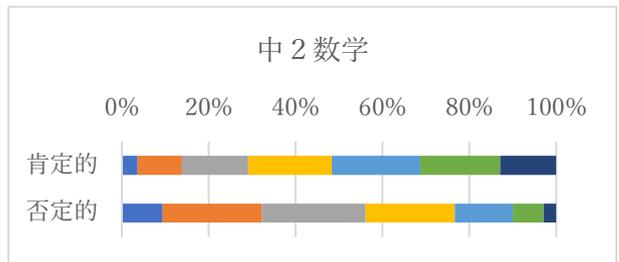
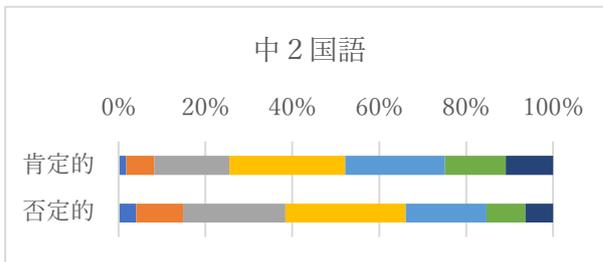
■ ステップ2 ■ ステップ3 ■ ステップ4 ■ ステップ5 ■ ステップ6 ■ ステップ7 ■ ステップ8



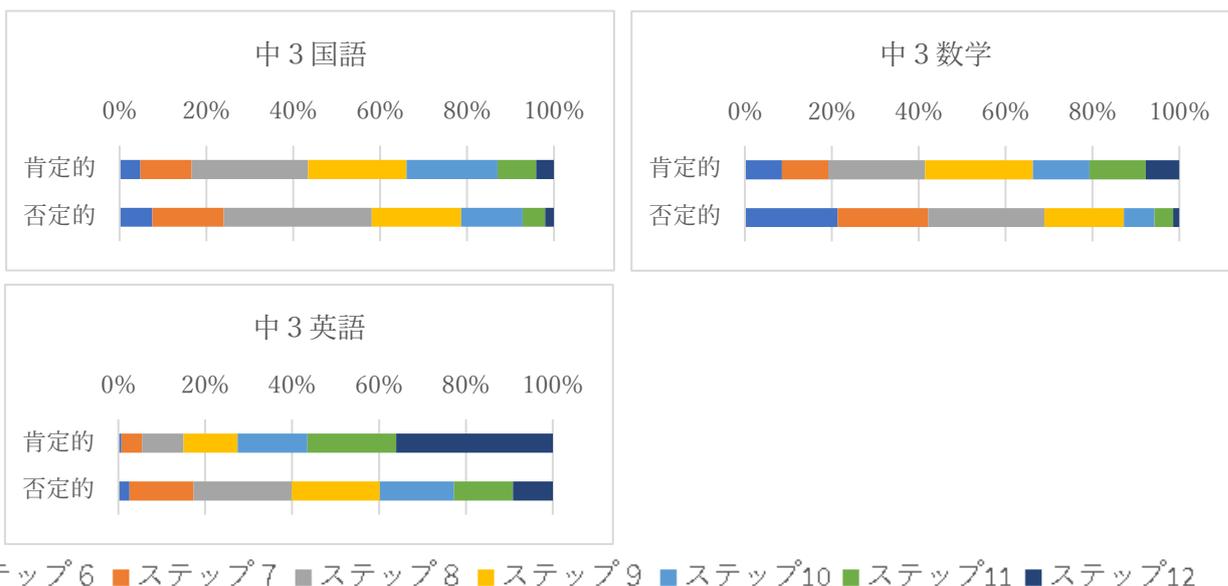
■ ステップ3 ■ ステップ4 ■ ステップ5 ■ ステップ6 ■ ステップ7 ■ ステップ8 ■ ステップ9



■ ステップ4 ■ ステップ5 ■ ステップ6 ■ ステップ7 ■ ステップ8 ■ ステップ9 ■ ステップ10



■ ステップ5 ■ ステップ6 ■ ステップ7 ■ ステップ8 ■ ステップ9 ■ ステップ10 ■ ステップ11



「教科の学習が好き」という質問項目の回答状況を学年毎に見ると、算数・数学及び英語において、学年が上がるにつれて肯定的な回答が減少した。とりわけ、英語においては顕著であった。

「教科の学習が好き」という質問に対して、「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」と回答する「肯定的」と「どちらかといえば、当てはまる」と「当てはまらない」と回答する「否定的」とに分けて見ていくと、すべての教科において、ステップが高い児童生徒ほど肯定的に回答している割合が多かった。

(4) 学カステップの違いによる学習習慣、生活習慣の回答傾向の違い
算数・数学について

- ・小学校は(下位3ステップ - 中位2ステップ - 上位2ステップ)
- ・中学校は(下位2ステップ - 中位3ステップ - 上位2ステップ)

で区切り、学習習慣や生活習慣に関する質問調査項目との関連を分析したところ、小学校、中学校ともに、次の質問項目で回答傾向に大きな差が見られた。

- ・ 家で、学校の宿題をしている。
- ・ 学習塾に通っている。(家庭教師に教わっている場合も含む)
- ・ 学校の授業時間以外に、普段(月～金)、1日当たりどれくらいの時間、学習をしているか(塾、家庭教師も含む)
- ・ 土曜日や日曜日など学校の休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、学習をしているか。(塾、家庭教師も含む)
- ・ 算数(数学)の学習は好きだ。
- ・ 朝食を毎日食べている。
- ・ 普段(月～金)、1日当たりどれくらいの時間、テレビ・ゲーム・携帯電話・スマートフォン・タブレットなどを使用しているか。(学習時間を除く)
- ・ 学校へ行くのは楽しいと思う。
- ・ 学校では安心して学習することができる。

例)「学校では安心して学習することができる。」の回答状況

小4	1当てはまる	2どちらかといえば当てはまる	3どちらかといえば当てはまらない	4当てはまらない	合計
学力ステップ低位層	44.6%	32.1%	14.3%	9.0%	100.0%
学力ステップ中位層	55.5%	32.6%	8.4%	3.4%	100.0%
学力ステップ高位層	63.3%	29.3%	5.6%	1.8%	100.0%
合計	58.3%	31.1%	7.6%	3.1%	100.0%

中3	1当てはまる	2どちらかといえば当てはまる	3どちらかといえば当てはまらない	4当てはまらない	合計
学力ステップ低位層	39.0%	45.9%	10.3%	4.8%	100.0%
学力ステップ中位層	50.7%	41.5%	5.9%	2.0%	100.0%
学力ステップ高位層	57.9%	35.6%	4.4%	2.1%	100.0%
合計	48.2%	42.0%	7.0%	2.8%	100.0%

Ⅲ 結果からの考察

教科に関する調査結果と「学びに対する積極性」及び「精緻化」との相関関係は、小学校第6学年以上の学年において正の相関がやや高くなる傾向が見られた。また、教科に関する調査結果と「表層理解」との間には負の相関がみられ、小学校第5学年以上の学年で顕著に見られる傾向にあった。学力ステップが高い児童生徒ほど、学びを広げたり深めたりするために自ら積極的に調べたり学んだりしようとする質問や、学んだことを関連付けたり活用・発揮したりする学習経験についての質問に肯定的に回答していることが分かった。また、学力ステップが低い児童生徒ほど、解き方が分からなくても答えが合っていればよいといった項目に肯定的に回答していることも分かった。

一方、「教科の学習が好き」という質問項目の回答状況を分析すると、教科間で差はあるが、学力との相関が見られた。「自己調整」、「学びに対する積極性」、「体制化」、「精緻化」、「主体的・対話的で深い学び」とも相関が見られた。

以上の結果から、教科の学習が好きであることと、主体的な学びにつながりがあると考えられる。各学校には、児童生徒の「もっと知りたい、探究しよう」とする知的好奇心を活かした授業展開や学習活動の工夫が求められる。そのためには、小学校の低・中学年から、ICT端末の利活用を含め、調べたいことや分からないことがある時に自ら行動できるような学習環境や学習機会の確保が求められる。

授業の中で、児童生徒が自分の考えを表現することや他者との対話に価値を見出し、目的意識をもって学習活動に取り組むことが大切である。

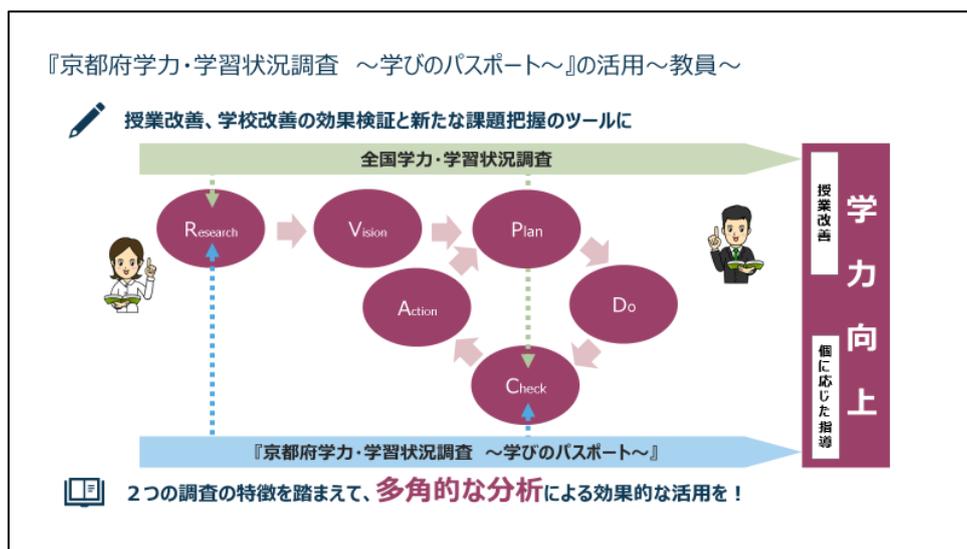
既習事項や他教科の学びを活かす等の学習経験を積むことで、教科の魅力や学ぶ意義を、児童生徒が実感することができると思う。

「主体的・対話的で深い学び」の項目の結果から、中学校は小学校と比較して、教科間で「主体的・対話的で深い学び」からの授業改善に差があることが見受けられた。教科の壁を越えて、学校全体で授業改善に取り組むことで、教科の魅力や学ぶ意義を児童生徒が実感することができると思う。

IV 調査結果の活用

～調査結果を活用した学校のRV-PDCAサイクルの確立～

本調査は、各学校で分析を行い、授業改善や個に応じた指導等に活用することが重要です。ここでは、各学校における分析・活用の手順例をお示しします。



1 児童生徒の状況を多角的に「Research」し、

「Vision」を共有し、「Plan」を立案

(1) 「学校改善プラン」等を作成する。

①学校教育目標・児童生徒の現状及び昨年度のまとめを踏まえ、目指す子どもの姿を具体化・焦点化

【1 学校名等】※1～3は、結果返却されるまでに記載する。

学校名								校長名	
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援	児童生徒数	名
学級数									
担当教員名									

※可能であれば中学校区で共通した「目指す子ども像」も記入してください。

① 目指す子ども像

② 目指す子ども像に対する現状と課題

③ 目指す子ども像に達するための仮説

②目指す子どもの姿に達するための仮説を構築

【2 具体的な取組内容】

※仮説を踏まえて、学校として、いつ、何に取り組むのかを記載してください。
 ※本資料作成のために新たに取組を増やしていただく必要はありません。これまで行ってきた取組を、本調査の目的の視点から再度捉え直していただくことを大切にしてください。

③仮説を踏まえた具体的な取組の明確化

【3 仮説及び成果を検証するための質問項目】※3は、すべての枠を埋める必要はありません。

学年	質問番号	質問項目	概念	備考

④仮説及び成果を検証する質問項目の焦点化

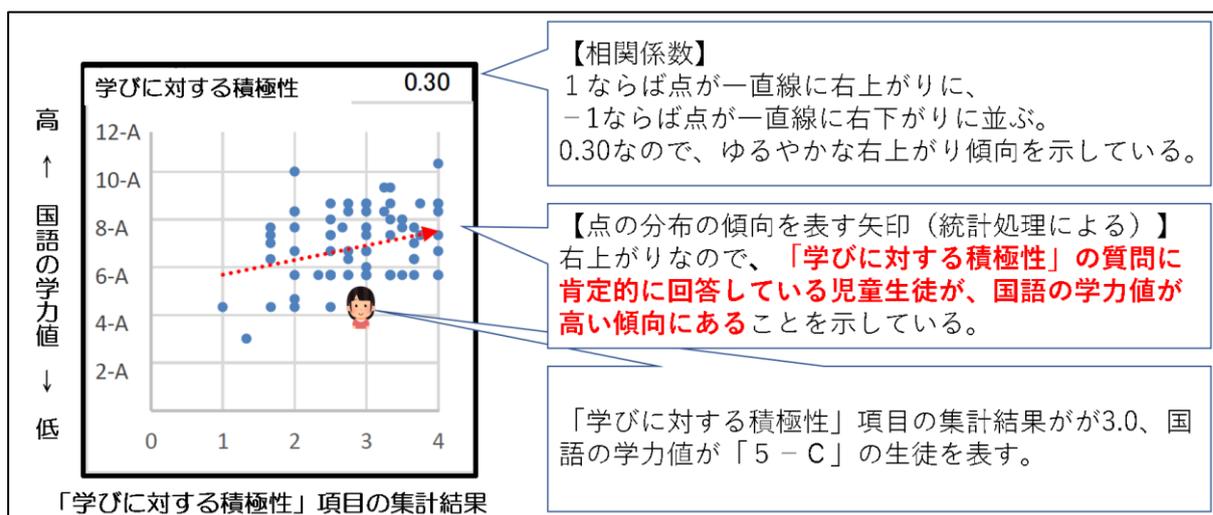
2 結果データを分析 (Check) し、

具体的な手立て (Action) を計画し実施

- (1) 結果データが返却されたら目指す子どもの姿をもとに分析したいデータを焦点化する。
- (2) 散布図等を活用し、一人一人及び集団の状況分析をする。

留意点

- ①非認知能力のすべてを映し出すものではないということ
- ②結果データのみで判断せず、観察との両面から判断すること
- ③あくまで相関関係を示すものであり、因果関係を示すものではないということ



【6 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法

②個に応じた指導・支援及び集団としての指導・支援のどちらも記述

集団としての指導・支援方法

【7 仮説の修正】

※分析結果を踏まえ、仮説の修正が必要であればここに記載してください。

③分析結果を踏まえた仮説の修正

【8 具体的な取組内容の修正】

※【7 仮説の修正】を踏まえ、具体的な取組内容の修正が必要であればここに記載してください。

④学校の具体的な取組内容を修正

(4) 児童生徒の振り返りを実施する。

- ①「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～振り返り用紙」の様式等を活用
- ②自身の学びの様子や成長等、調査結果を振り返る場面を設定
- ③児童生徒自身が強みと課題を知り、自身の状況を把握し、次への展望を持ち、学び続ける力をはぐくむことができるよう、指導・支援

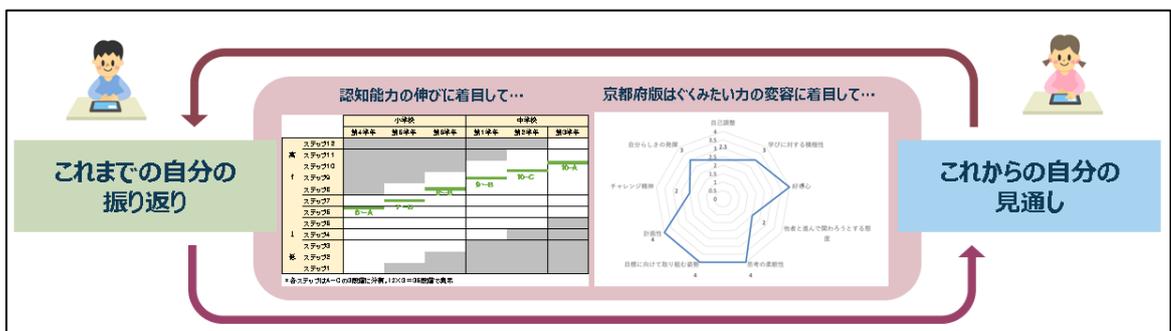
『京都府学力・学習状況調査 ～学びのパスポート～』の結果分析～児童生徒～

児童生徒に、結果を振り返る場面の設定を

表面

表面

結果を振り返り、自己を理解し自ら学び続けられるように



3 年度末に、今年度の学びの変容を再度「Research」し、
次年度の「Vision」を共有し、「Plan」を立案

【9 児童生徒の変容（普段の様子から）】

※【6 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】で計画した指導・支援を行った結果、児童にどのような変容が見られたかを記載してください。

①指導によって、児童生徒がどのように変容したのかを記述

【10 来年度の構想】

②来年度の構想を記述したのかを記述



次年度当初に②で立てた構想に基づき、
「学校改善プラン」等を作成

4 各研修会の内容

～令和5年度第1回「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」に係る分析・活用研修会～

対象：各学校教務主任及び研究主任等（複数名での視聴を推奨）



結果データの見方・捉え方や 分析及び仮説の構築の方法を理解し、学校改善プランの作成について見通しを持つことができる。

散布図の見方を理解し、データと見取りの両輪で具体的な手立てを考える。

3 分析 (1) 結果データの見方

【散布図（2つの項目の相関関係を視覚化）による分析】
質問調査の回答結果と教科の学力の結果から傾向把握が可能に

この生徒に注目してみましょう。
データからは、どんなことが分かりますか。

- 数学の学力値は低い
- 計画性の質問項目には肯定的に回答

「計画性」の項目を確認し、どんな生徒が想像してみてください。

- 計画的に学習しているが、計画の立て方に問題があり、学力に結び付いていないのではないか？
- 計画的に学習していると本人は思っているが、実際には計画的に学習できていないのではないか。

「計画性」項目の集計結果

3 分析 (1) 結果データの見方

【散布図（2つの項目の相関関係を視覚化）による分析】
普段の様子や、個人カルテと組み合わせるとより詳細に分析し、手立てに生かす。

この生徒に注目してみましょう。
データからは、どんなことが分かりますか。

- 数学の学力値は低い
- 計画性の質問項目には肯定的に回答

「計画性」の項目を確認し、どんな生徒が想像してみてください。

- 計画的に学習しているが、計画の立て方に問題があり、学力に結び付いていないのではないか？
- 計画的に学習していると本人は思っているが、実際には計画的に学習できていないのではないか。

Aさんですね、最近頑張っても結果がでないと悩んでいます。個人カルテで他の結果を確認すると、「学びに対する積極性」が低いですね。確かに、普段の様子を見ると、計画的を立てて頑張っていますが、分からないことがあると、どうしていいか分からず止まってしまう場面がみられます。「分からないときにどうしたらいいか」を話し合ってみようと思います。

最後は必ず、児童生徒の普段の様子と照らし合わせて手立てを考えることが重要

分析・活用の留意事項

研修資料より

非認知能力の全てを測ろうとしているのではなく、第2期京都府教育振興プランに基づき、府のはぐくみたい力を踏まえて構成

京都府版はぐくみたい力に関する調査（非認知能力に関する調査）

項目ごとに、

- よく当てはまる 4
- どちらかといえば当てはまる 3
- どちらかといえば当てはまらない 2
- 当てはまらない 1

とし、概念ごとに集計

「高いから良い」「低いから悪い」ではありません。

研修資料より

2 調査結果の活用 (3) 調査のよき活

数値やグラフを基に、仮説を立てながら指導の改善に生かす。

〇気になる児童生徒は？
〇学校としての強みは？逆に課題と捉えるところは？
〇どのような指導・支援をしたら、さらに向上するだろうか？
〇成果を次年度の調査結果で検証し、さらなる改善に生かす。

(3) 留意事項について

- 代表者や担当者だけで分析しない。
- データを様々な視点で読み取る。
- 参加する教員のそれぞれの視点から、子どもの様子を見取り、情報を共有する。
- 教職員全員で指導・支援の方法を検討し、共有する。

協議の中で
分析と指導・支援の方法を検討・共有

数値やグラフを基に、仮説を立てながら指導の改善に生かす。

- 気になる児童生徒は？
- 学校としての強みは？逆に課題と捉えるところは？
- どのような指導・支援をしたら、さらに向上するだろうか？
- 指導の成果を次年度の調査結果で検証し、さらなる改善に生かしていく。

教育データ・サイエンティスト（以下、教育DS）について

教育DSとは、データを活用し、授業や学校を変革させる人材のこと。

教育DSは、各市町（組合）教育委員会から推薦を受け、京都府教育委員会から承認された教員を対象に年間3回の研修会を実施した。研修の目的は、京都府学力・学習状況調査の結果分析及び活用について、先んじて学び、各地域の研修等で分析・活用のアドバイスができるようになることとしている。

～令和5年度第2回「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」に係る分析・活用研修会～

対象：各学校の国語、算数・数学、英語のいずれかを担当する教員



「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」に係る結果データに基づき、自校の授業改善案を作成し、実践に活かす。

全国学力・学習状況調査と学びのパスポートの役割について

	全国学力・学習状況調査	学びのパスポート
問題	<p>新しい学習指導要領が求める育成を目指す資質・能力を踏まえ、それを教育委員会や学校に対して、具体的なメッセージとして示すものとなるよう検討を進める。</p> <p>「全国的な学力調査の今後の改善方策について(まとめ)」(平成29年3月)</p>	<p>児童生徒一人一人の学力の伸びを測定するため、IRT分析を行うことから、様々な難易度の問題を出題する。また、問題を非公開にする必要がある。</p>
活用方法	<p>学力調査の問題、解答類型及び授業アイデア例を活用して、授業改善を行う。</p>	<p>学力と学習方法の傾向、認知能力と非認知能力の一体的な育成、等を読み取り、1人1人への具体的な指導・支援に生かす。</p> <p>また、2年目以降は、学力の伸びと非認知能力等の変容の傾向から、指導・支援の成果検証を行い、指導改善を行う。</p>

研修資料より

学びのパスポートの結果を授業に生かすために

【データを分析】し、【データを活用】したら、児童生徒の変容を把握し、指導・支援を修正する。

- ・「具体的な手立て」に対して、児童生徒がどのように変容したのか。
- ・児童生徒の変容にあわせて手立てを修正する必要があるのか、続けるのか。
- ・成果の見られた手立てを、学校教育の他の場面でも活用できないか。

「手立て」が具体的であるからこそ、「手立て」に対する振り返りが可能になる。

学校改善プランを更新し続けることで、効果的な指導・支援を学校全体のものとする。

調査の目的や特徴を理解し、適切に活用することが求められる。

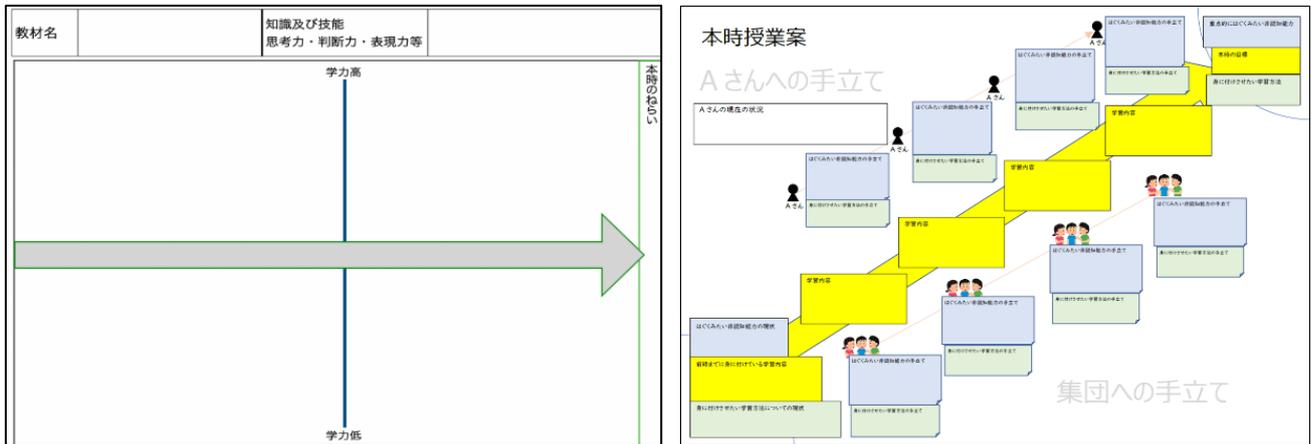
【参加者の感想より（趣旨説明）】

- ・学校改善プランについて、自校でも分析を行いまとめてきたが、説明されていた「誰が、いつ、何をするか」という視点がぬけていた。そこを考えないと具体的な改善とはならないので、自校に持ち帰り、考え直したいと思う。今後も、加筆・修正をくり返していきたい。
- ・「学びのパスポート」の説明は一度聞いていたが、今日改めて学力調査の意義、学びのパスポートの役割を再確認することができた。「課題は自分たちで解決するもの」という言葉は非常に共感できる。認知能力と非認知能力も一体的に育む授業となるよう、授業をアップデートしていく必要があると感じた。

分析結果を基に授業改善案を作成し、意図や手立てをより具体化させる

学校改善プランに記載した「分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て」の具体的な手立てを以下の3点に留意し、単元計画や授業計画に落とし込む。

- どの力の育成をねらいとして
- 単元や授業のどの場面で
- どのような手立てを行うか



【参加者の感想より（教科別部会）】

- ・データがあることで、他の教員とも協働して具体的な手立てを考えることができると思いました。ただし、データのみには頼るのではなく、目の前の児童生徒の姿を見て、実践していきたいと思いました。
- ・実際の授業の中に今回の分析結果をどう取り入れていくかという、ある意味で最も重要で最も難しい部分の研修であったと感じます。他校の先生方と色々と協議しながら授業構想について考えることができ、学びの多い活動になりました。個々の姿をイメージしながら、「具体的な手立てを打っていくこと」は授業で本来大切にせねばならないことであると実感しています。
- ・①集団への指導の工夫②個への指導の工夫 ③具体的に児童の姿を思い浮かべながら授業を考えることで、より具体的な手立てを考えることができた。学びのパスポートの校内研修では、分析→具体的な手立てを考えつつもりであったが、教材と単元のねらいが決まることでより具体的に手立てを考えることができた。来年度校内研修を行う際は、そこまで具体的に先生方に提示し、考える機会を設けたいと考えた。

【参加者の感想より（中学校区の交流）】

- ・小学校の様子を進学先の中学校の先生方に知っていただくことは必要だと思う。一方で、中学校で必要な力は何か、ゴールとする姿はどのような姿なのかを小学校としてきちんと知り、スムーズに中学校に進学できるようにしていきたい。
- ・同じ中学校ブロックの交流であったので、より具体的に子どもたちの顔を思い浮かべながら話をすることができた。中学校区内で、思いや願いを基にした目指す子ども像を一致させることの大切さや、授業改善の視点を共有することの必要性を感じたので、自校に持ち帰り、協議していきたい。

5 実践事例

(1) 児童生徒の状況を多角的に「Research」し、「Vision」を共有し、「Plan」を立てる。

【綾部市立綾部中学校ブロック（中学校）】：生徒の学力を向上させていくために



教員の経験（観察）と結果データとの両輪で結果の背景も含めて分析し、全教職員で仮説を具体化し手立てを検討する。

学校教育目標の具体化



本研究における綾部中学校で目指す子ども像：
夢の実現に向けて、努力できる生徒

「夢＝特定の職業」というわけではない。
今の時点での「夢」
こんな風に生きていきたい。
こんな大人になりたい。

努力できるって？
⇒「自己調整」できる生徒

のびしろしかない
綾中生をどう
伸ばしていくか？

(30)	自分の考えた道すしをほかの人の視点からも考えて、見つめ直すほうだ。
(31)	わからない問題にであつたとき、調べたり、さらに深く考えたりしている。
(32)	課題が終わったら、自分が学んだことを簡単にまとめている。
(33)	目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えていっている。

(仮説)
・具体的な将来の展望や、目指す目標を自己決定すれば、その先に向かって自己調整しながら、学びを自分ごととして捉えるのではないか。【生徒】
・授業が楽しい、学びが自分ごとになれば、家庭学習を自ら取り組むようになり、学習時間が伸びるのではないか。【生徒】
・教師の授業力が上がれば、生徒の学びが自分ごとになるのではないか。【教師】

学校教育目標を質問調査の言葉を手掛かりに、
目指す子どもの姿の焦点化と仮説の言語化

結果分析

方針共有

仮説の具体



複数名で対話をしながらデータ分析



自己調整と関連する項目とも関連付けて方針を共有



学年で取組と授業者の具体的な手立てを検討

学校教育目標及び校長の方針を基に、教職員の経験や観察とデータの両輪で分析や協議等を行うことにより、方針の背景の理解につながり、教職員の気持ちを揃えることができる。また、教職員の積極性を引き出し、同じ想いで子どもたちの手立てを考えることができる。

【栗田学院(宮津市立栗田小・中学校)】: 幼小中合同の栗田学院全体研修会の実施



教育目標、目指す子ども像の達成に向け、学院全教職員で結果分析を行い、授業改善、個別支援のあり方を検討し、実践に生かす。

趣旨の共有

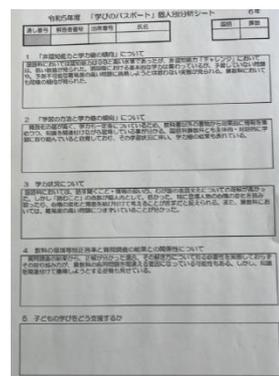
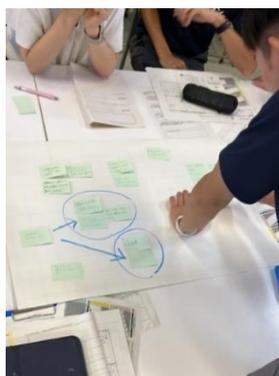
- ・ 幼小中10年間を見通した教育の重要性
- ・ 教育DSによる京都府学力・学習状況調査の趣旨説明

分析

- ・ 研究主任が「自己調整」、「チャレンジ精神」、「自分らしさの発揮」、「主体的・対話的で深い学び」の散布図に出席番号を記入した用紙を準備し、配付
- ・ グループに分かれ、各グループで教育DSや研究主任が1人を例に挙げ、具体的に分析することで、全教員が分析の方法を確認
- ・ 散布図の分布状況と普段の子どもの様子から詳細に分析したいと考える子どもを確認後、1人の教員が1人の子どもについて分析。分析結果を端末に用意されたシートに記入することで全員で共有

分析結果の活用

- ・ 共有した分析結果を基に、KJ法で具体的手立てを検討
- ・ 個人分析シートを作成し、子どもとの面談、指導の実践に活用



研究主任、教育DSからの趣旨説明、その後のグループでの具体的な分析方法の確認により、学院の全教職員が、「何をしたらよいのか」を理解することができた。そのことにより、「まずはやってみよう。」という雰囲気を生み出し、主体的な分析、具体的手立ての検討へと繋がった。

また、学年、校種を超えて分析を行い、手立てを考えることで、学院全体として一貫した指導・支援を行うことが可能になる。

(2) 結果データを分析 (Check) し、具体的な手立て (Action) を計画し実施する。

【栗田学院(宮津市立栗田小・中学校)】:研修成果の子どもへのフィードバック

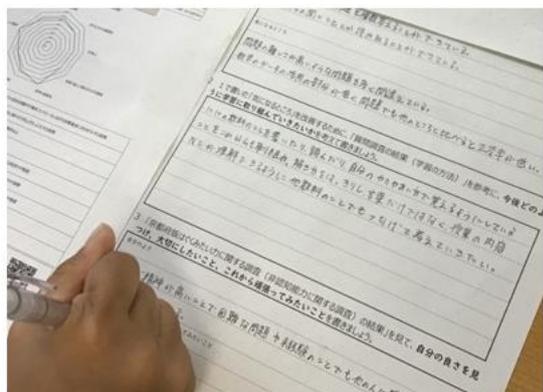


児童生徒が自らの学びを調整しながら、次の目標を設定できるような振り返りができる場を設定する。

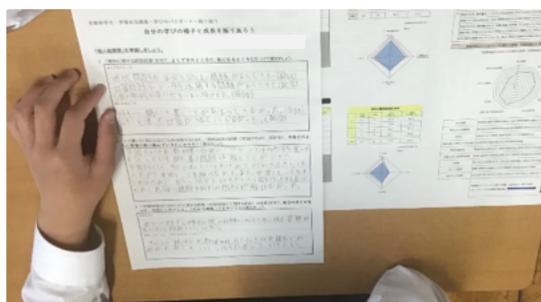
研修を踏まえた「学活での振り返り」

- 分析を踏まえた指導の方向性をもったうえで、学活での「振り返り」の時間の設定
- 「非認知能力の結果は高ければよい、低ければ悪いではなく、自分を理解するため」について教職員の共通理解

(中学生の振り返りより)



1つ1つの教科のことを書いたり、読んだり、自分のやりやすい方法で覚えるようにしていることをこれからも取り組み、解き方をはっきりし、言葉だけではなく、授業の内容などが理解できるように他教科のことでもつなげて考えていきたい。



学習するときは、教科書や授業のノートやプリントの内容を覚えるようにしていたから、基礎問題は解くことができた。学習するときに、自分で考えたことを改めてまとめなおしたりしなかったから、重要なことを解けなかった。また、学習したことをまとめるために、自分で簡単な絵をかいたり図を作ったりしなかった。

子どもが自己を客観的に見る機会とするためにも振り返りは重要である。調査結果の数値の高低に一喜一憂するのではなく、子ども1人1人が自己の特徴を知り、自ら「こうなりたい」と目標をもつことができるよう指導することが大切であり、そのためには、指導にあたる全教職員の調査結果の活用に関する共通理解が重要である。

【綾部市立綾部中ブロック（小学校）】：手立てや意図を指導案等に明記・子どもの見取り



現在取り組んでいる学校の研究に、着目している非認知能力等を育む手立ても具体的に記述することで、学校として目指す子どもの姿の具現化につなげる。

手立てや意図を明記

- ・児童生徒が非認知能力を発揮できる場面を意図的に設定
- ・手立てを色分けすることで授業者の意図が見える化

- 自己を理解するための手立て
- 自ら学ぶための手立て
- 個別最適な学びのための手立て

1 対象 第6学年 31名
2 日時 令和5年10月25日 水曜日 第6校時
3 場所 6年生教室
4 単元名 みんなで楽しく過ごすために
5 単元目標
◆言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気づくことができる。(知識・技能)
☆互いの立場や意図を明確にしながらか計画的に話し合い、考えを広げたりまとめることができる。
(思考・判断・表現)
◆言葉を通じて積極的に人と関わり、目的や条件に応じて、よりよい解決に向けて見通しをもって話し合おうとする。
(主体的に学習に取り組む態度)

6 単元指導計画

次 時	○学習活動	●自己を理解するための手立て ●自ら学ぶための手立て ●個別最適な学びのための手立て	評価規準【評価の観点】(評価方法) ○は指導にあらず形成的評価 ◆は継続して終学終時的評価
一 1	教材との出会い ○単元のゴールとなる言語活動や目標を知り、見通しをもつ。 「目的や条件に沿って計画的に話し合い、互いの思いが伝わりやすくなる」 ○これまでの話し合い活動を振り返り、ポイントを想起する。 ○話し合いの目的を共有し、必要な条件を考える。	●単元のゴールを提示し必要な力の具体的イメージを持たせる。 ●単元計画を提示し、ゴールに向けた活動の見通しを持たせる。 ●実現可能で必然性のあるゴール場面を設定する。また、1年生からのビデオメッセージを見てゴールを提示し、意欲を高める。 ※運動会後もさらに6年生と仲良くなりたいという1年生の思いを動機付けにする。	○目的や意図に応じて、議題に関する課題意識を明確にしている。 【思考・判断・表現】(発言・記述)
二 2	話し合うための準備 ○役割分担や時間配分などを決め、進行計画を立てる。	●言語活動の良いモデルを提示し、ゴールとなる姿を具体的にイメージさせる。	○目的や意図、条件に応じて、主張、理由、根拠に分けて自分の考えをまとめている。 【思考・判断・表現】(記述)

7 本時の目標
目的や条件に沿った話し合い方について課題を明確にし、次の話し合いに向けて目標を設定することができる。
【思考・判断・表現】

8 本時の見直し(4/7)

過程	学習活動	意 図	指導上の留意点 (研究主題にせまる手立て)	○◆評価規準【評価の観点】(評価方法)
導入	○単元ゴールと前時までの学習を振り返り、単元の中での本時の位置づけを確認する。 ○本時のめあてを確認する。	-> ->	○1年生からのビデオメッセージや単元計画を見たり、前時の振り返りを共有したりしながら、ゴールの達成に向けた本時のめあてを共有する。	
	自分たちの姿を分析し、課題を明確にしよう。			
	○活動の目標や内容を知る。 【話し合い】 話し合いの目的や条件に沿って、話し合いを広げたりまとめているのかという観点で話し合いを分析する。 【話し合い】 話し合いの目的や条件に沿って話し合いを広げたりまとめているのかという観点で話し合いを分析する。 【話し合い】 話し合いの目的や条件に沿って話し合いを広げたりまとめているのかという観点で話し合いを分析する。	-> -> ->	●撮影した動画を資料に、ポイントに沿って良さや課題点を見付け、次の話し合いに向けた課題を明確にする。 ●話し合いのモデル動画など複数の資料を提供し、必要な場面を選択して視聴できるようにする。 ●自分の進捗や状況に応じて学習の形態を選択させる。	○目的や条件に沿った話し合い方について課題を明確にし、次の話し合いに向けて目標を設定している。 【思考・判断・表現】 (発言・ワークシート観察)
原 則	○自分達の姿を分析し、目的や条件に沿	沿	●一定程度長い時間を確保した学習	●努力を要する学習

4年 体育科 B器械運動「跳び箱運動」
今年の中筋小学校では「自分に合った学習の仕方」を大事にしています。
4年生では、体育科の「跳び箱」の学習で、自分の課題を見つける→改善策を考える→課題の解決のために繰り返し練習する→という学びのサイクルを通して、開脚跳びや台上前転などの技の技能だけでなく、自己調整力も鍛えています。

「この単元のゴール」
とび箱運動「秘伝の書」を作ろう！

単元のめあて
①技のポイントを意識してとび箱運動ができる。(開脚跳び・抱え込み跳び・台上前転)
②自分のとび箱をしている姿から目標を決め、どうすればいいか考えることができる。
③安全に気をつけて、目標達成に向けてひたむきに取り組むことができる。

課題を発見！改善策を考えて、練習しよう！
自分の課題を発見することができました。例えば「もっとおしりを高く上げたほうがいい。次はもうちょっと勢いをつけてみよう！」といったように、個人の課題が浮き彫りになってきました。個人の課題を設定することができました！
それぞれの課題を解決し、目指す自分のゴールの姿に近づいていきましょう！

台上前転の4つのポイント
①両足で踏み切る
②手を手前につく
③おしりを高く上げる
④あごを胸に近づける

「うまくいったこと」は何か？
「うまくなかったこと(課題)」は何か？
自分が跳んでいるところや、回転している様子を動画で撮影しました。自分の動画を何度も見返したり、友達の前で自分の姿やお手本の動画と比べたりすることで、できていることとできていないこと(課題)がだんだんと明確になってきました。

台上前転にチャレンジ！
自分の現状や段階に合った跳び箱の高さやマットの種類を選択して、台上前転や前転にチャレンジします。
みんなで確認した4つのポイントを意識して跳び箱の上で回転することはできただけか？何度も繰り返し挑戦します。

お手本の動画をじっくりと見て分析します。

桶科つまきマット 3段の跳び箱 表らか跳び箱



非認知能力等に関する手立ても具体的に明記することや、子ども自身が選択・決定できる場面を理解することで非認知能力等を発揮できる。また、意図した場面での児童の状況を多面的に把握できることから研究協議が充実し、学校の研究が深まる。子どもの非認知能力等の発揮を、学校の研究に位置付けることで、継続的・発展的に認知能力と非認知能力を一体的に育むための教育を展開することができる。